はあまり影響していない。これは遊び以外に初めて知った仕事が絵を描くことであって最も興味を持つ為だろう。好きな色については地域的差は余り見られないが、幼いほど赤黄緑の原色に近い色を好み年令の増加に従って赤よりも黄や黄緑が多く次第に混色を好んでくるようである。以上のように幼児画の対象物は男女とも、人間を対象とすることは多いが男子は活動的な物を女子は静的な物を題材とし、また年令の増加に従って対象が単独に描かれず種々の物がつけ加えられる傾向がある。また、幼児画には、その環境が題材を支配している。すなわち子どもの体験や感情、願望を表現していると言えるだろう。

# Finger-Painting について

## (6) ——継続して描かせた指絵活動間の関係および経験の有無による差——

大阪市立大学　小西勝一郎
並河信子
山田聖子
千代田高校付属幼稚園　山下和子

**問題**　Napoli も指摘しているように、一般に絵画の診断においては、ただ一枚だけで評価することは危険が伴なうと考え、今回は一定期間をおき数回かかせ、未経験のものとの間に何らかの差があるかどうか、およびその数回の相互間に一貫した傾向がみられるかどうかを調査せんとした。

**方法**　大阪府下千代田高校付属幼稚園児三四名を対象とし、性別、年令、IQをマッチさせて実験群と対照群に分けた。

実験群は1週間ごとに一枚ずつ描画させ、対照群はその間指絵はかかせず、実験群の四回目と同日に、その第一回と同じ方法でかかせた。描画方法、評価項目については省略するが、今回は実際でも口頭でも持に指絵的描き方を教示せずただ自由にかくよう説明した。実験期間は智能検査は二月、指絵は二月末より三月中旬であった。

**結果と考察**　幼児の指絵活動のうち二六の項目について分析をこころみたが、全体の傾向として人差指による Drawing が多く、クレパス的描き方で、言語は少ないように思われた。

(A)　指絵経験の有無による相違をしらべるため、実験群の4回目と対照群の描画活動を各項目について$x^2$で検定したが有意な差を示すものは認められなかった。この結果からはわれわれの課した程度の指絵経験の有無によって大差を示さないと考えられるが、経験回数が更に大きくなるときにこれが妥当するかどうかは疑問である。

(B)　一定期間をおいて継続的にかかせた場合、そこに一貫した傾向が見られるかどうかを明きらかにするため、実験群の各回の描画活動の各項目の相関をしらべ直接確率によって検定すると有意な関連を示すものが若干みられた。すなわち期間の近接したものに関連のあるものが多いが、全体としては必ずしも一貫した傾向は見られず、各項目についても比較的関連の多い項目とそうでないものがあった。また個別的にみると非常に一貫した傾向を示す個人もあるがこの点については(7)でのべる。したがって一枚の描画活動で評価することは、よほど慎重を要すると思う。

最初にとくに指示をあたえなかった為、クレパス的描画法に固執した影響も考えられ、その他天候、はしかのはやったことなど考えるべき余地も多く再検討を要すると思う。